九、森壽美衛　長崎縣地理概要

一〇、森壽美衛　地理學上より見たる長崎縣の特色　長崎縣師範學校鄉土研究錄　第一輯

以上の諸論文中海岸地形に關する部分は本文の基礎をなすものである。從つてその中に輯錄されたる文獻はこゝにはすべて省略す。

一一、森壽美衛　多良嶽西麓地方の地理的景觀　地球　第十二卷、第十三卷

一二、森壽美衛　西彼杵半島の地形と文化景觀　鄉土科學　第十一號

一三、森壽美衛　橘灣沿岸の地形と文化景觀　地理學　第二卷

以上の小著中海岸に就て既述の事項は本文中には詳記しないやうにつとめた。而してその中に載せてあるカットもここに必要と思ふものがあるけれども重複を避けて、其の他のものを小數揭げるに止めた。

一四、海軍水路部海圖　長崎縣地方の各號

長崎縣の如く要塞地帶、秘圖地帶の多い地方に於ては地形圖は望み得べくもあらず、帝國圖も明瞭を缺くので海圖は一段と効果的である。特に海岸地形の觀察に於て然りである。

# 新著紹介

新著紹介

## ○日本の産業と貿易の發展

三菱經濟研究所

定價三圓七十錢

三菱の經濟研究所からは定期刊行物も出てゐるが特別刊行物としてさきに「世界經濟の現勢」を出版し「東洋及び南洋諸國の國際貿易と日本の地位」を刊行し、今回更らに本書を世に問はれた、さうして本書は實に先行の二書を序論としたもので、いはば本論が世に出た次第である、研究所員として佐倉氏以下十五氏が各々其專門の部門にわかれて、資料蒐集の上で記されたものであるから全篇いづこにも無駄な所はない、長岡理事の序文に見ると日本への西歐學者の關心は異常なもので倫敦からはギウンター、スタイン氏、米國ミシカン大學のリーマー教授などが昭和十年の夏やつてきて、いろ／＼日本の輸出貿易や其他圓爲替の低落等について研究したさうであるが、長岡氏はこの兩氏にそれぞれ資料を公開して、日本が獨りケレンや手管でその貿易の進伸をしめしたものでないことを證明したといはれ、新興日本の世界の脅威となつてゐるあらゆる産業方面の喜ばしい發展を叙述されてゐる。目次は第一部本邦經濟最近の發展、第二部本邦産業發展の背景、第三部基礎産業として農、漁、鑛、電の四部門を論じ、第四部主要工業としての繊維、機械、化學、窯業、食料品、其他について該博な資料と說明を加へ、第五部金融及運輸、第六部本邦外國貿易の進展を細述したもので、菊倍版七三三頁の大冊子である、これが僅かに三圓七十錢とはまことにやすい。さう

して我等は本書を繙くことによつて、いかに國内のあらゆる階級の民人が一致して國力の涵養にあたつてゐるか、さうして世界の何所と貿易をどういふ風にやつてゐるのか、之を一言にして日本内地と對外交渉との生きた地理を教へられるのであるから、何といつても有難い著書であるといはねばならない。我等は本書の至る所に於て正確な統計數字の上から正しい農業や工業各般の認識をふかめると同時に對外發展のいかに進みつゝあるかを教へられる。地理の教授をする人々はまづかうした著述に親んで、然る後に世界を我國民の活躍する舞臺として教授するやうに心得なくてはなるまい。勿論かうした經濟的貿易關係のみが教授の主體ではないけれども、我等の努力に伴つて、いかにそれが對外價値を生ずるかを知らしむる丈けでも本書からうける利益は大きい。筆者は本書を世に問ふた三菱研究所の多くの研究員に絶大の感謝をさゝげるものである。（藤田）

## ○現代新疆

ネダーチン著　中平亮譯　滿鐵經濟調査會發行　定價二圓二十錢

南滿洲鐵道株式會社經濟調査資料第七十九篇として昨年六月五日發行されたのを、最近に入手した。ネダーチン氏は現に滿鐵調査委員であるが、ロシヤの領事として十五年、後に支那稅關吏として十年の長い月日を新疆に過ごした人で其後も新疆省主席楊增新の顧問をやつてゐた人だから新疆を語るに申分のない人といつてよい。從つて譯者がいふやうに或は通り一邊の人の旅行記程の面白味はなくとも、その語る所はすべてこれ金玉の文字であらう。

四六版三四二頁、その目次は新疆概觀、境界、行政、地方及び諸都市、住民、ロシヤ人、英露の暗闘、新疆とロシヤ、交通、經濟、一九三一—三四の回教徒の反亂、及び結語の十二章から成立し、特に住民について詳述されてあり、嘗て清朝から西境警備のために派遣された滿洲人の子孫二十萬以上も住んでゐることを語り、その祖國の今日と對比して無限の感慨をよせてゐる。最後に英露の葛藤と、經濟資源が論じてある。本書を得て我等ははじめて、新疆が明にされた。我等はこゝで一應この方面を見直さなくてはならぬと考へる。最後に新らしい地圖もついてゐることを報告しておきたい。（藤田）

# 雜報

## ○昭和十年度　文檢地理科本試驗問題

筆答問題

一、氣節風地域に特有なる山形及び耕作景を說述せよ。

二、下北半島より北上山地を經て牡鹿半島に至る地域の地誌を說述せよ。

三、シベリヤにおける東西交通の幹線と開拓との關係につきて說述せよ。